P7-3　立位型床走行リフトの導入によりトイレや車の移乗が可能となり，仕事復帰に至った神経難病患者

○杉山 厳勇（OT），小口 健（MD），中本 佳代子（PT），北本 健太朗（OT），
神谷 克二（OT）

公益財団法人白浜医療福祉財団 白浜はまゆう病院

Key word：福祉用具，移乗，環境

【はじめに】仕事復帰のために車への移乗が必要であった症例に立位型床走行リフトを導入したところ，トイレや浴槽，車への移乗が可能になり，仕事復帰に至ったので以下に報告する．発表にあたり，本人に同意を得ている．

【症例紹介】封入体筋炎の既往があり，妻と2人暮らしで保険代理店を経営している70代男性である．歩行は1本杖を使用し見守りで可能だが，立ち上がりは高さ65㎝で要介助，トイレや入浴は妻が介助していた．営業の仕事で移動のために車が必要なので，本人は助手席へ乗り（座面高75㎝），運転は妻がしていた．自宅はバリアフリーで，玄関にはスロープ，トイレ，浴室に手すりがある．今回，トイレ前で転倒し，右第3, 4足趾中足骨骨折を受傷の為，入院でのOT, PT開始となる．本症例より車に移乗して営業の仕事がしたいと希望があったが，左肘関節伸展，両股関節，両膝関節屈曲伸展に著明な筋力低下を認め，また反復運動で筋疲労が出現し，プッシュアップ動作は困難であった．坐位は自立していたが，起き上がりは軽介助であった．立位は免荷中につき非実施であった．ベッド，車椅子の移乗はスライドボードを使用して軽介助であった．トイレは移乗困難なため尿器を使用，排便は緩下剤を使用し全介助であった．入浴は機械浴で全介助であった．症例はすでに在宅はバリアフリー化，介助者がいる状況であり，福祉用具に対する受け入れも良好であった．以上より，移乗動作が獲得できれば仕事復帰が可能となることが予測された為，OT目標を妻の介助でトイレ，浴槽，車への移乗の獲得とした．

【経過と結果】ベッドサイドにて上肢の筋力増強練習を開始した．翌日に筋疲労が残らない程度の高頻度，低負荷の運動に設定した．上腕二頭筋，上腕三頭筋では持続して行うと筋疲労がみられた．受傷2週目から免荷して車椅子への移乗を開始，足部の外固定を6週目で終了して立ち上がり練習を開始した．この頃より，前腕に重錘1㎏負荷での上肢の筋力増強練習や起き上がりが見守りで可能となった．8週目よりPT訓練時，両側ロフストランド杖使用にて屋内歩行が見守りとなった．MMTの結果では四肢筋力に著変なし，下肢の脱力感が出現すると転倒のリスクが高く，実用歩行は困難と判断した．さらにプッシュアップ動作でのトイレ，浴槽への代償的な移乗も困難な状況であり，車に移乗して営業の仕事がしたいと希望していた．自宅はバリアフリーであり，乗車までの環境は玄関からスロープであるため，立位型床走行リフトであるスカイリフトSL-2009U（以下，スカイリフト）が適していると提案した．妻の介助でスカイリフトを使用してトイレ，入浴，車への移乗を評価した．結果，妻の介助のもとトイレ，浴槽，車への移乗が可能となった．

【考察】封入体筋炎は，主に50歳以上で発症する慢性進行性の筋疾患である．臨床的特徴として，大腿四頭筋または手指屈筋（とくに深指屈筋）の筋力低下および筋萎縮，筋力低下は数か月以上の経過で緩徐に進行するとし，多くは発症後5年前後で日常生活に支障をきたすとされている[1]．その為，早い段階で福祉用具の検討が必要になると考えた．スカイリフトは端坐位保持が自立レベルの方を対象とし，トイレやベッドなど様々な移乗動作の介護力を軽減するための立位型床走行リフトであるが，本症例では早期にスカイリフトを導入できる状況であったことが，目標の達成に繋がったと考える．

【文献】

1）青木正志：封入体筋炎の診断基準と病態に関する最近の知見，臨床神経学54巻12号，pp1115, 2014.